



Title	Capacity to Be Aloneと潜在空間に関する質的研究 : 映画『もののけ姫』より
Author(s)	野本, 美奈子
Citation	大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 167-180
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Capacity to Be Aloneと潜在空間に関する質的研究

～映画『もののけ姫』より～

野本 美奈子

【要旨】

本論文は、筆者が今まで行ってきたD. W. WinnicottのCapacity to Be Alone概念に関する質的研究の発展である。日本文化を反映した映画『もののけ姫』を題材として、二者関係における「一人でいられる能力」と三者関係確立以降の「個になる能力」それぞれの獲得プロセスを追いつつ、Winnicottが主張した、内的世界と外的世界の間にある第3の領域、すなわち「潜在空間」を中心に分析した。

作品中の「森」は、かかわる主体によってその意味が変幻自在である「潜在空間」を示しており、主要人物アシタカとサン（ひとり）の「個（ひとり）」を獲得するプロセスに深くかかわっている。アシタカが心理的な危機を脱することができたのは、偏った自我の視点によって問題を解決せず、また、自我が潜在空間に屈することなくその危機に向き合い続けたためである。またサン（ひとり）のCBAは、父親（第三者）としてのアシタカが登場することにより、人格の統合に向けて前進し、潜在空間の意味を見出すことができた。これらのプロセスは、人間の文化的体験の中核にある「潜在空間」のリアリティと深く関わったために可能になり、さらにCBAには複雑なスペクトルがあるという仮説がたてられた。

1 はじめに

小児科医で精神分析家のWinnicott, D. W. (1958)が「情緒発達の成熟度を示す指標」として提唱した“Capacity to Be Alone 一人でいられる能力”が意味しているのは、物理的に孤独であることではなく、心理的に一人でいる能力のこと、即ち、一人でいても不安に陥らず、くつろぐことができ、自分の世界に夢中になれることである。Capacity to Be Alone（以下CBAと略記する）は「誰か（多くの場合は母親）がいるところで一人でいる」という逆説的な条件が必要であるとされ、この特殊な母子関係は“Ego-Relatedness（自我の関係化）”と呼ばれている。

筆者はこれまで、CBAについての量的・質的な研究を続けてきた（野本, 1997, 1999, 2000, 2001）。心理的に「ひとりである（である）」という現象をめぐる概念のなかでも、CBA概念がもつ含みは、「独立」や「自立」などの語で示される現象とは異なり、多重性や逆説性を包含するという点で非常に重要である。Ego-Relatednessが提供する時空間のなかで「ひとりである」ことを経験することから生まれる諸々の現象は、逆説を多く含んだ実り豊かなものであり、創造性などへとつながっていくものである。

Winnicottは、子どもが早期幼児期に（二者関係において）獲得すべきCBAの重要性を訴えたが、一方で、三者関係以降の人間関係においてもこの能力は情緒的成熟を示す重要な指標であり、「高度に洗練されたhighly sophisticated」現象であることにも触れている。筆者は、三者関係以降のCBAは高度であるだけでなく、早期幼児期のものと質的に異なる点もあると考えようになった。人は成長するにつれ、「個性」という、より個別的な属性を発達させ、「他の誰でもない私」という意味での「個」の問題に向き合うと考えるからである。よって当面、早期幼児期の「一人でいても不安に陥らない」という、Winnicottの原義に基づく本来のCBAを「低次CBA（一人でいる能力）」、三者関係以降のものを「高次CBA（個になる能力）」と名付け、それぞれについて研究を進めていくこととした。

2 本稿の目的

Winnicottは、CBAを既存の精神分析理論で取替えて説明するならば、Freud派では「原光景でひきおこされる感情を処理する能力」「攻撃的性愛的衝動ならびに観念の融合」「アンビバレンスに耐えること」、Klein派では「個人に独自の内的世界の中に内的な良い対象がつくられている」いること、となるとしている(1958)。

しかしWinnicottは後に、子どもは「誰かがいる所でしかひとりになれない」こと(Ego-Relatedness条件)に加え、その子どもが「子どもとそこにいる誰かとの関係性における共通の場」をもつということに考えを発展させた(1971e)。「一人であること」は「誰かがいること」だけでなく、「誰でもないもの」(内的対象でもなく外的対象でもないもの)をも暗に示している、ということに重きを置いたのである。CBAが単なる「ひきこもり」や孤絶の状態と誤解されるのを避けるために、これらは確かに非常に重要な論点である。後者は特に、Winnicottが主要論文『移行対象と移行現象』(1971b)や『遊ぶこと 理論的陳述』(1971c)でも述べている現象であり、その体験を治療においても重視していたことが窺える。Winnicottはその「体験」の場を「潜在空間potential space^{注1)}」と名付けた(1971e)。

本論文は、WinnicottがPeanutsやWinnie the Poohを使って移行的な空間の重要性を指摘したように(1971a)、日本文化による素材、映画『もののけ姫』を使って、日本におけるCBAおよびそれに関連する潜在空間について探索する試みである。『もののけ姫』は1997年に公開された宮崎駿監督による作品で、当時、日本の映画史上最高の興行成績(113億円)を残した(現在、同氏の作品『千と千尋の神隠し』が史上最高の興行成績を更新中である)。作品分析という方法論が臨床心理学的な考察に適当でない部分もあると思われるが、本作品が世代を超えた多くの人々の心をひきつけたストーリーであることから、日本人の心性を強く反映しており、そのなかからCBAイメージを取りだして論じることの意義は大きい、と筆者は考える。

『もののけ姫』は中世の日本が舞台である。中世は、古代と現代に挟まれ、古いものから新しいものへの移り変わりがあるとともに、両者がぶつかり合い、葛藤する、緊迫の時代であるとも言える。古い時代のものも新しい時代のももの勢いが強く、その時代特有のものを生み出すのは難しいが、逆にその混沌と混沌ゆえに、創造的なものが生まれ出る可能性も秘めている。Winnicottが重視する逆説が生まれやすい環境と見ることもできる。人が「個」の問題に向かい合う時も同じことが言えるのではなからうか。人生における大きな問題や障害に悩んだり苦しんだりする時、旧来のやり方では全く太刀打ちが出来ない状態となったり、かといって新たなものを生み出すにも、その術さえ分からない状況であったりする。しかし、大きな転機を経て、新たに独自の世界観をもつことができるようになる人も多くいる。

筆者は別稿で、小説『フランケンシュタイン』を取り上げ、古いものと新しいものとの間から創造物を生み出す難しさ、そして創造主が自らの「個」に向き合うことを回避し、病的な孤独に陥ったため、その創造物が「創造的」ではなくなり、分裂しつぎはぎになってしまったという悲劇と、そうして生まれた怪物の意味と破壊性について述べた(野本, 2001)。そこでの考察を通して、怪物の創造主フランケンシュタインに欠けていた自我と創造性について考えるようになった。また、日本人のCBAについて研究するためには、文化に根ざした考察が必要であり、本稿において『もののけ姫』を取り上げることにした。

3 『もののけ姫』とその「潜在空間」

精神分析におけるWinnicottの大きな貢献の一つは、内的現実(私的現実、個人の内的世界)と、外的現実(客観的に知覚できる実際の世界)という2つの領域を仮定する精神分析の理論的枠組に加えて、2つの領域の「間」にある、時空感を越えた第3の領域を想定したことである。この領域は、「中間領域intermediate area」「移行空間transitional space」「潜在空間potential space」などと呼ばれる。

こうした空間は、乳幼児が「自分でない」所有物“not-me” possession(1971b)を使うという逆説的な現象や体験、毛布の端を口に入れたり喃語を言ったりしながら空想に耽っている時の体験から始まる。具体的な対象は、握りこぶしであったり、ぬいぐるみであったり、と多種多様なパターンがあり、その所

有物は「移行対象」、その現象は「移行現象」と呼ばれる。この第3の領域はCBAと深く関連している。というのは、乳幼児が「一人でいられる」ようになるのは、母親が何もしないでそこにいた時に一人であったという体験、その関係(Ego-Relatedness)のためであり、その時母親と子どもの間にあるものは、現実とも幻想とも言えないからである。母親は実際には何もしていない(「対象」として存在しない)が、何かがあれば必ず子どもを世話したり助けたりする雰囲気をかもしだす(「環境」として存在する)だろう。子どもはその関係性を所有しているのである。

一人でいても不安でないなら、外界からの侵入や刺激への反応を強いられず、のびのびとありのままの自分でいられ、くつろぐことができる。後には感覚や衝動が「実在感をもち、真に彼独自の体験となる」(Winnicott, 1958) ことを可能になるが、このことは「遊ぶことplaying」につながる。子どもは遊んでいる時、「年長の子どもや成人の集中concentrationに似た、引きこもりに近い状態」(1971c) になるとWinnicottは述べる。Winnicottの示す「遊ぶこと」とは、「生きることの基本的形式である時間-空間の連続体における体験」で「無限に感動的」なものであるが、「クライマックスがない」(1971c)。すなわち人間の体験の中核にあるが、本能満足ではなく文化的体験に近いものである。こうした点から、「一人でいる」時の心的状態は「遊ぶこと」に限りなく近いと考えられる。

人間は生涯にわたって、このような体験世界、すなわち「主観性subjectivityと客観的観察objective observationが感動的に織り混ったところ」(Winnicott, 1971d) や、「内的現実と外的(共有)現実のどちらに属するかを問ひ質されない」(Winnicott, 1971b) ところでの体験を、芸術的体験や宗教的体験、文化的体験世界へとつなげていく。これらの領域のなかでも特に、象徴的で隠喩的な空間、大人が、芸術や文化や宗教を体験する空間は「潜在空間」と呼ばれている。本稿では、Winnicottが第3の領域(中間領域、移行空間、潜在空間)について述べたことを応用し、潜在空間とCBAをつなげて考察していきたい。

さて『もののけ姫』に戻ろう。本作品の主な舞台は、日本に昔からある深い「森」である。太古からの神々がすんでおり、その中心には傷を癒す力を持つ池があり、その中に天と地を結ぶ世界樹がそびえ立っている。「コダマ」と呼ばれる小さな精霊たちは、「シシ神」が現れる時に一斉に現れたり、すっと消えたりする。シシ神は、神と名がついているが、他の神々とは格の違う、生と死を司る存在、いわば「森」そのものである。観客は、シシ神が死ぬ時には森も死ぬのだ、世界全体さえも死ぬかもしれない、とそれとはなしに理解するだろう。シシ神は、一言もことばを発することがなく、昼と夜で身体の色を変え(夜は「デイダラボッチ」^{注2)}になる)、傷を癒し、生を与える時もあれば、命を吸い取る力も持っている。そのためか、シシ神の首には不老不死の効果があると言われている。シシ神は時間からも空間からも自由である。

シシ神や森が、個人の内的な空想でないことは明らかである。Winnicottは、潜在空間のなかにあるものは「個人や集団が流れこみ、そしてそこから私たちがすべて引き出せるような、人類共有のプールの中にたまっているもの」(1967) であると述べている。「太古から」そこにあった森は、長い長い生命の流れを受け継ぎ世界を見守ってきたとあるが、世界樹は、多くの神話で語り継がれてきた生命の源の象徴である。すべての生きとし生ける者の生死を司る場というイメージは、人々の文化に深く根づいており、シシ神や森は、登場人物や作品の制作者個人の内的な空想ではない。また、シシ神や森は、万人に共有される外的現実でもない。そこは現実検討力や制御の届く領域ではなく、地球環境の保全という現代的な観点にも強調はおかれていない。生命の営みを象徴する「森」とは、かかわる主体によってその意味が変幻自在である時空間であり、まさに「潜在空間」を示している。移行対象は、「見つけられるべくそこにあったにもかかわらず、赤ん坊によって創造されたものでもある」とWinnicottは述べている(1968)。「もののけ姫」のなかで、人々はそこに在る「森」のなかになにを創造したのであろうか。「森」を舞台の中心として展開するストーリーのなかで、CBAと深く関連するさまざまな潜在空間イメージを追ってみたい。

4 「もののけ姫」分析

本稿は、『もののけ姫』で見られる日本人のCBAと潜在空間のイメージについて検討するので、それに関連する登場人物や神々のみを初めに紹介する。次に、ストーリーの進行にそって、「一人でいる」ための過程、「個になる」ための過程について考察する。本作品の豊かなイメージと文化的背景のなかには、取り上げられないテーマも多くあり、また、『もののけ姫』のみで日本人のCBAイメージをすべて扱えるわけではないが、上に述べたように、日本人の心性を強く映し出している作品として見ていきたい。

(1) 登場人物たちとその意味

1) タタラ場の人間たち

「タタラ場」の人間たちは、人里離れた湖のほとりに城塞を築き、その中の製鉄工場で鉄を作ることによって近代文明を繁栄させてきた。このコミュニティを構成している人々の中心は、いわゆる社会的弱者である「女性」や「病者^{注3)}」である。女性リーダーの「エボシ御前」を中心にして強固な連帯感をもち、製鉄工場の利益を横取りしようとする圧倒的な数の侍たち（とその社会）との戦いを続けてきた。男たちもいるが、女たちのほうがはるかに生き生きと生活しており、外の世界とは違う、境界や辺境に生きる人々独特の特徴が表れている。彼らは、製鉄に必要な木材を調達するため、聖なる「森」の木を伐採して森の獣神たちの怒りをかい、製鉄技術の発展で可能になった石火矢（鉄砲）を神々との戦いで駆使するために、神々との対立をますます深めている。彼らは神々を怖れる一方、駆逐したいと願っている。

2) 神々

「シシ神」の森に住む獣神たちは、「大きく太古のままに」生きていられると言われている。しかし、何度となく繰り返されてきた人間と神々との戦いは、文明の発達のため、徐々に人間側に優勢となってきた。獣神たちの人間に対する憎しみや恨み、怒りは、彼らの神性から、「崇り」に変容して人間たちを襲うようになったと考えられる。

「モロの君」は山犬のメス神である。パートナーはおらず、子どもの山犬を2頭連れてくる。人間が生贄として捧げた赤子のサンを、山犬の子として育て上げた。タタリ神になった「ナゴの守」と「乙事主」は、元々は勇壮なイノシシの神だった。彼ら獣神たちが守ろうとするのは、生命の源である「森」である。しかし神々の絆は分裂しつつあり、「猩々^{しょうじゅう}」（かつては森に木を植える神であった）のように神性を捨て墮落したものもある。

3) アシタカとサン

「アシタカ」が生まれ育った故郷は、古い習わしや伝統を受け継ぎ、自然を敬い、それと共生してきた閉鎖的な集落である。アシタカは、そのエミシ一族を束ねる長となるべき若者として、その役割を担い、優秀な長としての将来を期待されていた。物語は、彼がタタリ神を殺してしまうところから始まる。彼が一人旅に出なければならなかったのは、アシタカが長としての人生ではなく、彼自身の人生に向き合う局面だったからとも考えられるし、中世のこの時代に、古きものままでは生を継続できないという大きな力がはたらいていたからだと考えることもできる。

「サン」は、山犬の怒りを鎮めるため生贄として捧げられ、山犬モロを母として育ててきた。モロは愛情をもってサンを育ててきたようであり、サンは純粋な山犬の（精神的）血統を受け継いでいる。十代前半の少女といういでたちだが、「もののけ姫」として人間と戦う時には仮面を付け、獣のように縦横無尽に走り回り、エボシの命を狙い続ける。

(2) 「一人でいる」ために、「個になる」ために

筆者は本作品を、アシタカの高次CBA（個になる能力）獲得の物語と、サン（発展した）低次CBA（一人でいる能力）獲得の物語が並行しているものとして分析する。また、サン的心灵的現実においては、モロは母親、アシタカは父親の役割を担っていると考えられるが、ストーリーにそってその詳細を述べて

いきたい。

1) 崇り(旅の始まり)

アシタカは、村を襲おうとしたタタリ神を矢で射殺し、右手に呪いの傷をうける。それは熱で溶けてアザとなり、やがてアシタカを殺すものであった。巫女のヒイ様は「誰にも運命は変えられない。だが、ただ待つか自ら赴くかは決められる」「西の土地で何か不吉なことが起こっているのだよ。その地に赴き、くもりのない眼で物事を見定めるなら、あるいはその呪いを断つ道が見つかるかもしれない」と告げる。

心の病に罹ったり、心の傷を負った人、人生の問題に取り組む人は、決して、好んでその苦しみを受けるわけではない。その傷はタタリ神のように突然現れ、痛みと苦しみを伴い、死を予言されるような痛手である時もあるだろう。心の傷に向き合うことを自ら決めた者の旅立ちは「掟に従い、見送らぬ。健やかにあれ」と送られ、単身、重々しい雰囲気の中で始まる。己の運命、生死にかかわる一大事では、現実的もしくは象徴的に、「独りで」旅に出ることが必要とされる。但し、この時、意識的には「呪いを断つ」ため、または苦しみから解放されるため、という動機である場合もあるだろう。

2) 潜在空間体験

アシタカは、森の精霊コダマと共生できると思い、尊重し、敬意を払う。近代的な人間(タタラ場の男)がコダマを恐れるのに対し、アシタカがコダマと友だちになれるのは、潜在空間に属するものに自然に態度を開いているからである。ただし、この姿勢はアシタカが生きてきたコミュニティーの伝統の継承によるものとも言える。しかし、アシタカが初めてシシ神を見た時の体験は、より鮮明に潜在空間的である。森で一休みしていたアシタカは何かの気配を感じ取る。視界の向こう、煌々とした光の中で、シシ神がアシタカの方を向くが、顔は見えない。アシタカの腕が暴れ出し、恐怖と衝撃が走るが、にもかかわらず、アシタカはシシ神に魅了され畏敬の念を持ったようだ。それは、アザを消してくれるかもしれないという淡い期待からだけではなく、アシタカにとって、なくてはならない、大いなるものとの出会いだったからであろう。シシ神が自分にとってどういう存在であるのか、自分は何のために旅に出たのか、我を見ると同時に、そこで起こる体験が自分の意思でコントロールできないことを知っている。シシ神が去るのを見送り、彼はひとり、池に映る自分の姿をみつめている。ここでアシタカには、シシ神の登場と彼のアザとの関係を心理的に結びつける動きが起り始めている。

ケガをしたタタラ場の男を背負って送り、タタラ場で生き生きと生きる人々を目にすると、アシタカはその世界でも和やかに過ごすことができる。が、慎重に自分の居場所を探そうとし、自分の旅の意味を考えて、葛藤している姿も垣間見え、彼の自我がはたらき続けていることが分かる。

3) 崇りを生きる

タタラ場の男たちが、戦いを挑んできた猪の神に石火矢を放ったことを誇らしげに語った時、アシタカはタタリ神がそれとなった由来を知る。まさにその石火矢のつぶてによって崇られたその右腕はエボシを殺そうと剣を抜きかけるが、アシタカ(の自我)はそれを必死にくい止めている。この時病者は、自らが病で呪われているためアシタカの怒りや悲しみはよく分かるが、自分を助けてくれたエボシを殺さないでくれ、と懇願している。その夜、サンとエボシの戦いを見ていたアシタカは、かつてないほど活発に妖気を放つ右腕でもって、戦いに割って入る。そしてエボシに「そなたの中には夜叉がいる。この娘の中にもだ。みんな(この腕を)見る。これが身の内に巣くう憎しみと恨みの姿だ……肉を腐らせ死を呼び寄せる呪いだ!これ以上憎しみに身をゆだねるな!」と言う。気を失ったサンを背負い、誤って撃たれて重傷を負い血を流しつつも「わたしは自分でここへ来た。自分の足でここをでて行く」と、十人でやっと開けられる重厚な門を開け、タタラ場を後にする。

病者は、呪いを慰めてくれるエボシに仕えることを生としたが、アシタカは別の道を選んだ。意識的に彼を選んだというより、彼の右腕のアザの「妖気」、「夜叉」が彼と一体となって選んだと言う方がより正しいだろう。ここで筆者が注目するのは、崇りに対する、アシタカの自我の関与のしかたである。神々や人間たちはお互いがお互いに対して呪いの由来を押しつけ合っているが、彼はそれが「身の内に巣くう」

ものだと訴えている。元来、温厚で親切なアシタカには不似合いのこのタタリ、すなわち破壊性や攻撃性は、彼の心の内部から切り捨てられて外へ排出され、他者のものとはされていない。また、怒りや破壊性に身を任せて自我が乗っ取られ、タタリ神になってしまうということもない。アシタカは祟りを抱えたり背負ったりして生きようとしている。今まで生きたことのない自分をも抱えることは、苦しみや痛みを伴う。しかし、潜在空間に開かれ始めているアシタカは頑なに今までの自我にこだわることなく、自我を差し出すことなく、もちこたえている。また、アシタカの行く先には「森」があったが、それは、彼が祟りとともに生きるために、異界に出ること、生を賭けた体験をする必要があることを示している。

4) 「生きる」(サン)のCBA

サンは、人間を森から追い払うために命も落とす覚悟であった。だが、サンを救うため瀕死の重傷を負ったアシタカの「生きる」という言葉は、サンの中の何かに触れたようである。そして「そなたは美しい」というアシタカという言葉に驚いて、態度を一転させ、シシ神にアシタカの生死を委ねた。これはどういうことだろう。ここでサンがCBAについて検討し、CBAのスペクトルという新たな観点を呈示したい。

A) サンの早期幼児期

サンが、単に人間の両親から見捨てられ、愛情を注がれることなく成長した少女であれば、彼女の人格はばらばらになり、モロと深い心の絆を築くことはできなかつただろう。サンは、一人で森を駆け抜けている時にも不安な様子ではなく、自他も分化しており、ある程度のCBAを身につけているように見える。サンが実際にどのように育ったかは作品中で明らかにされていないが、こうした様子から、モロが「ほどよい母親good-enough mother^{註4)}」(Winnicott, 1971b)の役割を果たしたことが暗に示されている。ここで重要なのは、種の違うモロから提供された、この一連のほどよい環境を、サンが取り入れることができたことである。Ego-Relatednessが「対象としての母親」ではなく「環境としての母親」が与える関係性であることの重要性はここにある。すなわち、モロがもつ属性(山犬であること)にかかわらず、モロが果たした「抱える環境」という役割によって、子どもは「一人でいられる」ようになることが示されている。それでは、なぜアシタカの「生きる」という言葉にサンは揺れているのだろうか。

B) アシタカと出会ったこと ～低次CBAのスペクトル～

ここで、アシタカに出会ったことによるサンの中の内的変化を考察し、CBAと三者関係について考察を試みたい。

最も根源的なCBAの獲得過程で、母子関係は、原初的な一体化から逆説的な関係性への移行が重要であった。そこでの潜在空間は、母子一体でありながら分離しており、分離していながら一体であることの象徴であった。Winnicott (1958)は、より発展したCBAの例として、子どもが原光景で引き起こされる感情(憎しみ)を克服し、自慰行為の糧とできることを挙げている。「両親との三角関係のなかで一人でいながら、空想を活用しながら楽しむことができる」(北山, 1985)という、想像力や楽しむ能力のことであり、ここでは「不在の母親がいる」ところで「一人でいる」時に生じた創造力(想像力)の発展に重点がおかれている。WinnicottはさらにEgo-Relatednessが確立された環境において「衝動や官能が現実のものとなり、本当にパーソナルな体験となる」(同)という体験も強調している。

サンがCBAは母子の二者関係性のなかで獲得されてきたが、自分は山犬でないという現実検討がなされるようになり、母なるものとしてサンを包んできた神々の世界が衰退し始めていることは、母子一体という幻想からの「脱錯覚disillusionment^{註5)}」が徐々に進んでいる子どもの心的状況と近似している。Winnicott (1968?)は、「考えることは、母親の適切な対応の段階的な失敗に対処するために乳児がとるパーソナルな方法として始まる」とし、錯覚と脱錯覚が繰り返されること(段階的な失敗)のなかで、個人の思考や想像力が育まれるという、力動的に推移する情緒発達という観点を提示している。

サンは「生きる」ことに頓着していないように見える。閉塞した二者関係のなかで(山犬として)「生き」続けることは、現実的には「生を賭ける」「死ぬ」に等しい。ここで父親としてのアシタカが現

れて「生きる」と言う。Winnicott (1969) は、good-enough motherがその役割を果たした後、父親が「子どもに統合と個人的な全体性を、最初にみせてくれる者」の役割を果たし、「自我の組織化」や「赤ん坊の心的な概念化conceptualisation」において統合体として動く述べている。アシタカはモロのパートナーではないものの、第三者としてサン^{パンツル}の脱錯覚を間接的に促し、サン個人として生きることを指し示しているという点で父親である。ここでWinnicott (1966) が女性的要素として挙げる「あるbe」という要素と自我の支持という側面、そして男性的要素として挙げる「するdoes」という要素と自我の組織化という側面の対応性にも、注目すべきであろう。

筆者は、CBAを低次と高次に分けて考察してきたが、このようにサン^{パンツル}のCBAを検討していくと、いわゆる原義のCBAに複雑なスペクトルがあることを想定することができる。一者関係（母子が一つのunitであること）から二者関係（間に潜在空間が存在する）へ、そして二者関係から三者関係へと、子どもの環境が変わることによって、「個」であることをめぐる事象はめまぐるしく変わる。たとえば、サンにとって森は、未だに、山犬サンを育ててきた現実的な環境であり、その（象徴的な）意味をサン個人が見出すべくそこに在るもの（潜在空間）としては存在していないように見える。CBAをめぐる諸要素、諸能力は、一つの地点を通過することによって全てが獲得されるわけではなく、錯覚と脱錯覚を繰り返しながら生涯にわたって発達していくものであると考えられるのである。

5) ともに生きること（アシタカのさらなる意識化プロセス）

シシ神によってアシタカの致命傷は癒えたが、アザは消えなかった。彼は、それを「呪いがわが身をくいつくすまで、苦しみ生きる」というシシ神のメッセージとして受け取った。ここでアシタカは、アザの妖気とともに決心した場所から歩を進め、潜在空間での体験（撃たれたことによる致命的な傷が劇的に治ったという体験と、アザが消えなかったという体験）から、その運命とともに生きることを再び選んでいる。呪いの由来を知り、呪いから逃れるために旅を始めたアシタカの自我は、ここで明確に呪いを引き受け、それとともに生きることを言語化しているからである。

静かな夜、森を見渡す崖の上でのアシタカとモロの緊迫した会話の場面で、モロは、サン^{パンツル}の運命が森と共にあると告げ「お前にあの娘の不幸が癒せるのか」「お前にサンを救えるか？」と一喝する。ここでアシタカは、「わからぬ……だがともに生きることはできる！」とこたえた。それは、サンとともに人間と戦い憎しみを増やすことではないと言う。憎しみを増やさずに「ともに生きる」とは、どういうことか。

これも潜在空間での体験から得たアシタカの自我の答えである。サン（アシタカ）が背負った不幸（運命）を消し去ることは、もはやサン（アシタカ）の一部となったものに目をつぶることである。その傷や運命は魔術的に消し去るべきものではなく、それに伴う苦しみを背負って生きることで、新たな生を見いだす可能性がある。「個」を獲得するプロセスは、必然的にそうした傷や痛みを背負うことを必要としている。「生きる」ということは、サン^{パンツル}の「生きる」道を提示したが、今や「ともに生きる」となったアシタカの決意は、分離し「一」となった両者の間に潜在空間があるはずだということを示している。「ひとり」になることは、単独の「一」となること、遊離した「一」となることではなく、生のつながりやその背後にある世界とのつながりを統合していくことであると彼は訴えている。

6) 神の領域を「信じること」（潜在空間の意味を見出す）

サンは、人間たちに瀕死の重傷を負わされた乙事主を、シシ神のお池に癒してもらおうとするが、タタリ神になってしまった乙事主の毛穴から噴き出すドロドロに呑み込まれていく。この時、サンは「いやだ……タタリ神になんかなりたくない！」と叫ぶ。翻弄されるがままに生きてきたサンが、初めて自分の言葉^{言葉}を話したかのようである。サン^{パンツル}の自我がはっきりと叫んだ時、シシ神が登場する。

これは、自我が関与することによって、潜在空間の意味が現れることを表している。サンには、母なるもの、「森」に守られている感覚があったかもしれないが、そうした感覚は自我がかかわることによって初めて、潜在空間的な存在としてサン^{パンツル}の「体験」の枠に入ることができる。潜在空間がそこにただ「在る」ものではなく、自ら「見出した」種の意味を帯びたため、サン^{パンツル}のCBAはここでさらに発展している。

池の水面を歩いて幻想的に登場したシシ神は、荒ぶる乙事主の命を吸い取り、デイダラボッチに変身す

る途中、エボシに首を撃ち抜かれ、身体が森に飛び散ってしまう。そのため森は急速に死に向かっていく。エボシにとってシシ神は、生命を象徴する潜在空間的な存在ではない。しかし森が死ぬことによって初めて、その場にいる近代的な人間たちは、シシ神が我が身にかかわる領域の存在であったと知る。

サンが人間に怒り狂って、「わたしは山犬だ！」とアシタカを拒否するのは、まだ、(サン個人としての)自我の組織化が脆弱であることを示している。だが、アシタカは「すまない。何とかとめようとしたんだが……」とサンの絶望感と怒りを抱きかかえ、「まだ終わらない。わたしたちが活着ているのだから」と自我の組織化を支えるという「父親」の仕事をしつつ、「人間」としてシシ神の首を追い、遂にそれを「人の手で」返した。シシ神の首が身体に戻ると、徐々に森に緑が回復しアシタカのアザは消えてゆく。なぜ森が死に、アザが消えていったかについては、後の潜在空間の考察の項で詳しく検討したい。が、この回復の力を「信じる」「待つ」ことができるという彼らの力は、サンとアシタカそれぞれが成熟の道へ、歩を進めたことを表していると言えよう。

この物語は、サンとアシタカが結婚するという西洋のおとぎ話によくある結末とは異なっている。サンは森でアシタカはタタラ場で暮らすことになり、2人は引き裂かれながら「共に」生きていく道を選んでいる。サンはアシタカを「好き(Like)だ」と言い、アシタカを真に「信頼する」ことができるようになった。アシタカは二人のあいだにある世界が「死んでいない」ことを教えている。アシタカとサンが母子関係の延長に生じる父子関係であると解釈してきたのは、こうした理由からである。彼らの関係は本質的に、愛による男女関係(Id-Relationship)ではなく、その間に潜在空間をもつことで、お互いの「ひとり」を確立する関係(Ego-Relatedness)なのである。彼らが共有している世界がどこにあり、何であるかを問うことはできないが、ヤックル(アシタカの乗る動物)に乗って会いに行くほどの距離にいる2人のあいだには何かがあるため、観客はその結末に安心することができるのである。

5 もののけ姫をめぐるCBAに関する臨床心理学的考察

(1) 崇りの二側面(高次CBA獲得プロセスのなかで)

まず、アシタカの高次CBA獲得過程のきっかけとなった「崇り」を歴史的な視点から見てみたい。そもそも崇りとは、「神仏や霊がその意に反する人間の行為に対してもたらすとがめ・災禍」のことである。日本では古い時代から、荒び、たけぶ神々の崇りを祝詞によって懐柔してきた。祝詞(延喜式巻八)による遷却崇神祝詞の神話では、崇りをなす悪い神々に退却してもらうために、これらの神々が鎮座すべき場所が祝の中に表現される。次なる鎮送の地を最高の誉め言葉によって讃え、崇る神を懐柔しようというのである。巫女のヒイ様もそれに従い、タタリ神をなだめている。また、「崇」とは神が交信を求め、祭りを要求する手立てであるとも考えられている。だとすれば、タタリ神に呪いを受けたアシタカは、神の求める交信の引き受け手ということになる。『もののけ姫』では、前者、すなわち「とがめ・災禍」という意味での崇りと、後者、すなわち「神の求める交信」という意味での崇りの両者ともが、アシタカが「個になる」プロセスにおいて重要な意味を持っている。

自分にふりかかった出来事(心理的危機)を「ばちがあたった」「日頃の行いが悪かった」「ご先祖様が怒った」というように、神々のとがめ・災禍として振り返ったり、自らの意思で解決できるものではなく、お祓いやお祈りで懐柔しつつ向き合うといった心性は、現代にも残っている。このような時、自らの意思や決意(自我)でコントロールしようとする、独善的であったり偏っていたりするために、堂々巡りや悪循環に陥る可能性がある。必ずしもそうとは限らないが、臨床現場で出会うクライアントの多くは、自分の意思や努力ではどうにもならない問題を抱えていることが多く、心理的問題の多くは、「崇り」の側面を担っていると考えられる。心理的危機と神とを結びつける態度が日本文化のなかに継承されていることは興味深く、この態度は本作品でも大きな役割を担っている。

アシタカは集団の長として活躍する力を持っていたが、彼の世代を境に村は廃れていく気配があった。村を守るという重要な任務に従ってタタリ神を殺した彼のその行為は、皮肉にも自分を死へ追いやる運命となった。彼は、今までの規範で生を継続できない大きな出来事に会ったことになる。アシタカが「呪

いを断つため」に一人旅に出た頃は、意志に反して暴れ、人を殺めようとするアザを必死に抑えていたが、後に、濃くなってきて、シシ神の気配で暴れ出したり異様な妖気を放ったりするアザを、自律的な力を持つものとして迎えるようになった。神が与えた災禍は、彼のもの（アザ）でもあり、彼でないもの（タタリ）でもあった。彼は、徐々にその攻撃性や破壊性に逆らわなくなり、さらにその潜在空間性を能動的に引き受けるようになる。今までの彼の生き方では、呪いや祟りから仲間を守ることはあっても、それを持つ苦痛や哀しみに身を置き、それとともに生きることはなかつただろう。彼の村が衰退に向かっていたのは、そうしたことから逃れてきたからかもしれない。

こうして見ていくと、アザ（祟り）はアシタカ個人にしか負えない（癒せない）傷であり、彼であるからこそ意味を持つ傷であると言うことができよう。つまり、祟りを、心理的危機としてだけでなく、神からの何らかのメッセージであるとか、痛みや苦しみを伴いつつも新たな道に進む糧として捉えられるかどうか「個になる」過程における重要な要素とも言えよう。また、彼が「タタリ神」にならなかったことは、祟りに乗っ取られなかったこと、祟りを経て生き残ったことである。アシタカには、「潜在空間的な」ものとしての祟り（森）に「自我」が能動的に向き合うことが同時に起こっている。村の衰退や、時代の流れといった大きな問題に、自らの「個」の問題をかけて自分の人生を生きるためには、このように、潜在空間と自我の両者にひらかれた態度が必要とされる。個性を追求する心が他や世界と遊離したところにある時、それは真の創造性ではなく、病的な孤独を生み出してしまう。病的な孤独は、果てしない荒野の中で堂々巡りをし、独善的に、頑なに「ひとり」に固執するため、広がりを持たない。真に一人でいることは、一人でも「間」にある世界を感じ、その世界と関係をもてることである。むしろ、個を追求すればするほど、「間」の世界に自我が能動的にかかわる必要があると考えられる。「間」の世界のものと生きることは、強い苦痛を伴うかもしれないが、必要不可欠な傷でもある。

（２）「個になる」ための過程と「一人でいる」ための過程の関係

人々は人生において、自分の「個」を追求してだけでなく、子どもや他者の「個」を支え守る役割を担う場面に出会うだろう。同時に二つの仕事をすることは非常に困難であろうが、自分の「個」を追求することと同じように、他者の「個」を支えることも非常に重要な仕事であり、そのことによって「個になる」過程が促進されることもあるのではなからうか。Winnicott (1958) は、CBAが「転移の原基matrix」であると述べている。筆者は『もののけ姫』からそうした相互交流に関する考察を試みたい。

アシタカが重傷を負い、眠っている間にシシ神に傷を癒された後、サンは、衰弱したアシタカに、食物を口の中で咀嚼して食べさせた。アシタカはそこで静かに涙を流している。「個になる」ため、戦いにつぐ戦いを繰り返していた彼に、この体験はどのような感情を引き起こしたのだろうか。

アシタカはそれまでに、モロによって「一人でいられる」ようになっている（分離した「一」となっている）サンに、彼自身の子ども部分を投影し、それを養育し癒していたと考えることができる。そこで生じる子どもの反応は、親自身の何かでもあり、子ども自身の何かでもある現象であり、転移現象（投影同一化）である。（心が）死にかけていたサンが、生きるために必要な食物（情緒的關係）をアシタカに与える、という行為は、アシタカがサンにしたことでもあり、サンがアシタカにしていることでもある。

また、サンが口で噛み砕いたものが、アシタカにとって、サンとの関係を象徴する証として彼の実際の栄養（現実）となっていることは、その潜在空間がリアリティーをもって定位されることも示している。筆者はここで、こうした転移関係のなかで、子どもだけでなく両親も、そこで生じる潜在空間のリアリティーに非常に影響を受けるだろうことを指摘したい。潜在空間は常に個人と環境の間にあるとはいうものの、人々はふだん、乳幼児が初めて移行現象を体験している時ほどのインパクトをもってそれを感じることは少ないかもしれない。しかし最早期の母子関係のように濃密な関係が生じた時、母親はその「間」にあるものの強烈なリアリティーを感じるだろう。父子関係においても、その間に潜在空間が横たわり、その意味を問う作業が行われているため、両者に強烈な心的相互交流が起こり、潜在空間のリアリティーが現れることが推測される。このように、CBAをめぐる相互交流は、両者の「間」の存在を際立たせ、それにリアリティーを持たせるはたらきをする。

「個になる」過程は、苦しく長い道のりだが、自我がそれに向き合い続けることが重要であり、同時に「間」にあるものを体験することも不可欠であると前項で考察した。こうしたことが現実的に「独りで」行われるなら、自我が偏っていく危険性を孕んでいる。彼らの間にある「森」や「祟り」、「関係性」とそこでの体験は、彼らを結びつけ、彼らの「ひとり」を成熟させていく基盤であり、低次CBAと高次CBAは手を取り合って成長していくために、お互いを必要としている。

また、「一人である」ためには「間」の世界のあたたかさ（母親のもつ養育的な雰囲気）と関係をもつことが必要だとWinnicottは述べたが、「個になる」ためには「間」の世界の狂気や苦痛との関係性に直面せざるをえない。人類が積み重ねてきた歴史や文化の中には不幸も多く含まれているが、それと対峙することを避けて「個性」を追求することは、真に「創造的」に生きることを阻害してしまうのである。

(3) 潜在空間イメージとその運命

Winnicottは『移行対象と移行現象』のなかで、「その対象は、徐々に心的エネルギーの備給が撤去される運命をもっている、したがって、何年後かには、忘れ去られていくというより、リンボ界^{注6)}に追放されてしまうのである。つまり、健全な発達において、移行対象は“内側に入る”こともないし、それに対する感情が抑圧される必要もないということである。忘れられることもなく、悲しがられることもない。それは意味を失うのである。なぜなら、移行対象は拡散していつて（中略）中間領域全体に、いわば文化的分野全体に広がってしまうからである」（1971b）と述べている。

森が死んで生まれ変わり、アザが消えたことは、潜在空間の意味が変質し、その世界に生きる人々が新たな潜在空間を見出す段階が訪れたことを示している。意味を失ったものは消失するが、その潜在空間領域自体が枯渇したりなくなったりすることはない。新たな意味を帯びるために形を変えるのである。この作品では、人々や神々に棲んでいた「怒り」や古きものとの「対立」が新たな意味を持つようになったと考えられる。

アシタカやサンと森との関係は「一体化」ではなく、最終的には「隣に」いるような関係である。シシ神が再び姿を現すかどうかは定かではない。しかしアシタカはそこに存在した世界を体験している。各々の人の前に、シシ神や森は違う形で現れる。神様、お地蔵様、ご先祖様、自然、特別な体験かもしれない。しかし、これらとの関係が情緒的成熟となるためには、それのみこまれたり、一体化することなく、自我が限りなく近くで関与することではないだろうか。潜在空間の中で生きること、潜在空間と一体となることは、神の領域に踏み込むことで、人間のすることではない。だが、「森」を信じること、「森」を体験することはできる。Winnicott (1971e) の表現を借りれば「連続性continuityが隣接性contiguityに地位を譲る」のは潜在空間においてであり、潜在空間と「つながる」というイメージは「一」が存在するからこそ可能となる。自らが潜在空間や他者に吸収されるのでもなく、頑なな「一」を固持することでもない。彼らが森から得たものは、本能を充足する体験ではなく、文化的な体験であり、生き生きと「間」を体験し、「個」に向き合うことであった。

6 おわりに ～新しい概念の提示～

『ものけ姫』を題材として、CBAと潜在空間に関する質的研究を試みた。近年、「個性の尊重」が叫ばれるが、「個」を「潜在空間」から切り離して体現することは、「ひきこもり」や「個人（中心）主義」に陥る危険性を孕んでいることを筆者は強調したい。Winnicottが提示したCBA概念は、その逆説性ゆえに広がりがあり、複雑なスペクトルをもつという仮説をたてたものの、二者関係を想定して造られた概念であるため、三者関係確立以降の高度に洗練されたものについて検討していくと、同じCapacity to Be Aloneという言葉では表現し尽くせないところがある。筆者は、個性にかかわる力を「個になる力」、または高次CBAと呼んできたが、ここで“Capability to Be Individual”という語を提唱したい。

名詞capacityとcapabilityの違いは、『新英和大辞典』（1980）によると、前者は「①収容能力 ②a)容量、容積 b)最大限の収容力 ③a)包容力、度量 b)（学問など）学び取る力、学問的才能、知的能力、理解力

c)適応力、耐久力 d)可能性 ④能力、(…する)力」など(以下略)となっており、後者は「①…することのできること[力]、能力、才能、手腕 ②性能、(利用の)可能性[力] ③未発達の能力、(今後伸びる)素質、将来性」となっており、後者は、既存の容量だけではなく未発達の能力も含んでいる。「個になる」ためには、必然的に潜在空間に対面する自我が必要となると述べてきたが、こうした力はpotentiality(潜在能力)だけでも、元々あるcapacity(容量)だけでもなく、両者を包含し変化していく力であるので、capabilityという語が適当ではないかと思う。

Winnicottが特にindividualという語について述べたものはないが、発展したCBAが「抑うつポジション depressive position」(Klein, 1935)と関連することを示唆している(1958)。抑うつポジションはWinnicottによると「思いやりの段階Stage of Concern」(1950-55)、「個としてのパーソナリティ・パターンが確立される」時期(1965)である。相手を部分対象ではなく全体対象として見るようになるゆえに生じる罪悪感とともに、「生きていく上で存在する全ての感情と観念に、責任をもてる」(Winnicott, 1960)ようになり、その人らしさ(パーソナリティ)を作っていくということである。より複雑な組織を持つ「個」へ、そしてin-divide(これ以上分けられない)という意味で、唯一の、その人個人になる、という意味を込めて“Capability to Be Individual”とした。

また、CBAが複雑なスペクトルを持つという観点から、“Capability to Be Personal”の段階があることも想定される。一人でくつろぐという状態は、私的な(personal)時空間をもつことでもあり、個人的に(personal)なることでもある。そしてWinnicott(1962)はPersonalizationという言葉で「その基底にイド衝動とイド満足を含めた自我と身体のしっかりとした結合」という意味合いを含ませている。「個」をめぐる過程は、原初的な母子一体の状態から個性にかかわる問題まで、非常に複雑だが、一個の人格として、心と身体が統合されるという側面も見逃せないことであり、今後の研究で考察していきたい。

質的研究により、Capacity to Be AloneからCapability to Be Individualという概念を提唱するまで至ったが、今後の研究は、治療論に発展させ、セラピストとクライアントの「間」の質(転移-逆転移関係)について考えていきたい。アシタカとサンの関係性と、そこで生じていた緊迫感や現実感、心理療法における転移-逆転移関係やその現象にもあてはまると筆者は考えている。

<注>

- 1) potential space: 「可能性空間」と訳されることもある(狩野訳, 1996)
- 2) デイダラボッチ: デイダラボッチ(大太法師)とも呼ばれる。東日本を中心に伝わる伝説の中で、山などに現れる巨人の妖怪として畏敬を持って描かれている。
- 3) 病者: 『もののけ姫』で登場する病者のモデルはハンセン病患者と言われている。
- 4) good enough mother: ほどよい母親(必ずしも幼児の実母でなくてもよい)とは、「幼児の欲求に能動的に適応し、さらに、母親の適応の不十分なのを説明できたり欲求不満に耐えることができる、幼児の能力が増大していくのに応じて、次第にその能動的な適応を減らしていくような母親である。(中略)この能動的な適応には1人の幼児に気楽に、根気よく没頭することが必要なのである。実際、育児が成功するかどうかは、母親が幼児にどれだけ専念するかという事実によって決まるのであって、決して母親が利口であるとか知的に高いとかによって決まるのではない」(Winnicott, 1971b)。
- 5) 脱錯覚disillusionment: 幻滅とも訳される(橋本, 1979)が、北山(2001)は非外傷的なものを「脱錯覚」と呼んで区別している。「ウィニコットによれば、母親が依存する乳児に適応し、おむね適切な時に適切な場所に良い対象を差し出し続ける場合、乳児には、対象は乳児が創造したという錯覚(illusion)が生まれる」(北山, 2001)。子どもは、母親が(離乳期頃に)「子の成長に従い自然に育児に段階的に失敗する」(Winnicott, 1968?) ことによって、徐々に錯覚から脱してゆく。
- 6) リンボ(limbo): [キリスト教(カトリック)において] 古聖所。地獄と天国との間にあり、キリスト教に接する機会のなかった人や洗礼を受けない小児・異教徒・白痴などの靈魂の住む所。

【参考文献・引用文献】

- Abram, J. 1996. *The Language of WINNICOTT: A Dictionary and Guide to Understanding His Work* Jason Aronson Inc.
- アニメージュ編集部編. 1997. フィルム・コミック『もののけ姫1』 徳間書店
- アニメージュ編集部編. 1997. フィルム・コミック『もののけ姫2』 徳間書店
- アニメージュ編集部編. 1997. フィルム・コミック『もののけ姫3』 徳間書店
- アニメージュ編集部編. 1997. フィルム・コミック『もののけ姫4』 徳間書店
- Casement, P. 1985. *On Learning from the Patient*. Tavistock Publication.
- 松木邦裕訳. 1991.『患者から学ぶ ウィニコットとビオンの臨床応用』 岩崎学術出版社
- Grolnick, S.A. 1990. *The Work and Play of Winnicott*. Jason Aronson Inc.
- 野中猛・渡辺智英夫訳. 1998.『ウィニコット著作集別巻2 ウィニコット入門』 岩崎学術出版社
- 川上範夫. 1995.「移行現象論」 小此木啓吾・妙木浩之編. 1995.『精神分析の現在』至文堂 pp.134-143
- 川上範夫. 1996.「生き生きと「遊べること」そして創造的に「生きられること」」
- 牛島定信・北山修編. 1996.『ウィニコットの遊びの概念』 岩崎学術出版社 pp.89-99
- 北山修. 1985.『錯覚と脱錯覚～ウィニコットの臨床感覚』 岩崎学術出版社
- 北山修. 2001.「幻滅と脱錯覚」精神分析研究. 45(1) pp.12-17
- Klein, M. 1935 "A contribution to the psychogenesis of manic depressive states"
International Journal of Psycho-Analysis. 16. pp.145-174
- 小稲義男編. 1980.「新英和大辞典」研究社
- 松木邦裕. 2001.「クラインの二人の分析的息子たち——ウィニコットとビオンの場合——」
精神分析研究. 45 (2) pp.141-151
- 野本美奈子. 1997.「Capacity to Be Aloneと情緒的成熟に関する一考察」
大阪大学人間科学研究部卒業論文. (未公刊)
- 野本美奈子. 1999.「Capacity to Be Aloneに関する基礎的研究」
大阪大学大学院人間科学研究科修士論文. (未公刊)
- 野本美奈子. 2000.「Capacity to Be Aloneの逆説性と多重性に関する研究」 大阪大学教育学年報. 5 pp.125-137
- 野本美奈子. 2001.「"Capacity to Be Alone"に関する質的研究の試み——小説『フランケンシュタイン』より——」
大阪大学教育学年報. 6 pp.279-288
- Ogden, T. H. 1986. *The Matrix of the Mind, object relations and the psychoanalytic dialogue* Jason Aronson Inc.
- 狩野力八郎監訳. 1996.『こころのマトリックス—対象関係論との対話—』 岩崎学術出版社
- Winnicott, D.W. 1950-55.「情緒発達との関連でみた攻撃性」
妙木浩之訳. 1990.『児童分析から精神分析へ』 岩崎学術出版社
- Winnicott, D.W. 1958. "The Capacity to Be Alone" *International Journal of Psycho-Analysis*. 39. pp. 416-420
- 牛島定信訳. 1977.「一人でいられる能力」『情緒発達の精神分析理論』 岩崎学術出版社pp.21-31
- Winnicott, D.W. 1960.「本当の、および偽りの自己という観点からみた、自我の歪曲」
牛島定信訳. 1977.『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社pp.170-187
- Winnicott, D.W. 1962. "Ego Integration in Child Development"
牛島定信訳. 1977.「子どもの情緒発達における自我の統合」
『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社pp.57-66
- Winnicott, D.W. 1966.「分裂—排除された男性的要素と女性的要素について」
北山修監訳. 1998.『精神分析的探求2』 岩崎学術出版社 pp.72-106
- Winnicott, D.W. 1968.「幼児と母親および母親と幼児のコミュニケーション、比較と対比」
成田善弘・根本真弓訳. 1999.『赤ん坊と母親』 岩崎学術出版社 pp.97-112
- Winnicott, D. W. 1968?。「考えることと象徴形成」
北山修監訳. 1998.『精神分析的探求2』 岩崎学術出版社 pp.134-139
- Winnicott, D. W. 1969.「「モーゼと一神教」の文脈における対象の使用」
北山修監訳. 1998.『精神分析的探求2』 岩崎学術出版社 pp.171-180
- Winnicott, D.W. 1971a.「序論」 *Playing and Reality*. Tavistock Publications.
- 橋本雅雄訳. 1983.『遊ぶことと現実』 岩崎学術出版社 pp.ii-v

- Winnicott, D.W. 1971b. 「移行対象と移行現象」 (同上) pp.1-35
Winnicott, D.W. 1971c. 「遊ぶこと——理論的陳述」 (同上) pp. 53-73
Winnicott, D.W. 1971d. 「遊ぶこと——創造活動と自己の探求」 (同上) pp. 74-90
Winnicott, D.W. 1971e. 「文化的体験の位置づけ」 (同上) pp. 135-146
Winnicott, D.W. 1971f. 「私たちの生きている場」 (同上) pp. 147-155

**A Qualitative Study on
'Capacity to Be Alone' and 'Potential Space'
——with a special reference to the film
"The Princess MONONOKE"**

NOMOTO Minako

This paper was developed from the previous qualitative research conducted by the psychoanalyst on the D. W. Winnicott's (1958) concept, 'Capacity to Be Alone'. By using the film "The Princess MONONOKE" which reflects Japanese culture, as an example, the paper attempts to analyze the third area, 'potential space' which Winnicott stated to exist between internal and external worlds, while looking at the basic 'Capacity to Be Alone' and the highly sophisticated 'Capacity to Be Alone' in two-body and three-body relationships respectively.

"The forest" in the film represents 'potential space', for it transforms its meaning depending on the attitude of the subject, and it influences the process of becoming "One (HITORI)" in Asitaka and San who are main characters of this film. Asitaka managed to overcome the psychological crisis not with the partial ego, but by continuing to face the potential space instead of yielding to one. And, San could start to integrate personality and find the sense of 'potential space' for herself, because Asitaka, her symbolic father (the third person), appeared. It is discussed that these processes become possible because it deeply involves the reality of 'potential space' which is the core of cultural experience, and hypothesized that 'Capacity to Be Alone' has complicated developmental stages which is like a spectrum.

